



KODANSHA

2023年3月13日

大江健三郎さん ご逝去のお知らせ

作家でノーベル文学賞受賞者の大江健三郎さんが3月3日未明、老衰のため逝去されました。享年88。葬儀は家族葬にて執り行われました。ここに、謹んで哀悼の意を表し、お知らせ申し上げます。

なお、ご遺族への取材等はお控えくださいますようお願い申し上げます。後日、お別れの会を開く予定です（期日未定）。

大江健三郎さんは、1935年1月31日、愛媛県喜多郡大瀬村（現・内子町大瀬）生まれ。東京大学在学中の1957年、「奇妙な仕事」が東大の第二回五月祭賞を受賞して文壇の注目を浴び、1958年、23歳のときに「飼育」で芥川龍之介賞を受賞、その後、数々の文学賞を受賞し、1994年には川端康成に次ぎ日本人として二人目となるノーベル文学賞を受賞しました。その後も2013年の『晩年様式集（イン・レイト・スタイル）』にいたるまで精力的な創作活動を続け、その集大成が『大江健三郎全小説』（2018～2019年）としてまとめられました。

大江さんはまた、『ヒロシマ・ノート』（1965年）、『沖縄ノート』（1970年）などのルポルタージュや新聞、雑誌などでの社会的発言でも注目を浴び、核問題をはじめ現代日本が直面しているさまざまな課題へ向き合いました。2004年には「九条の会」、東日本大震災後には「さようなら原発1000万人アクション」の呼びかけ人の一人となり、デモや講演活動にも傾注されました。「戦後民主主義」者を自認し、つねに社会へ警鐘を鳴らし続けた生涯でした。

代表作に、『芽むしり仔撃ち』（1958年）、『個人的な体験』（1964年）、『万延元年のフットボール』（1967年）、『洪水はわが魂に及び』（1973年）、『同時代ゲーム』（1979年）、『新しい人よ眼ざめよ』（1983年）、『燃えあがる緑の木』（1993～1995年）、『取り替え子（チェンジリング）』（2000年）、『水死』（2009年）などがあります。

あらためまして、ご冥福をお祈り申し上げます。

株式会社 講談社